がむしゃら！

ふりる。

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
がむしゃら！

【Ｎコード】
Ｎ０６０９Ｗ

【作者名】
ふりる。

【あらすじ】
男嫌い克服のためだけにオーディションを受けた葵。ただ、そこは女子禁制…男だらけの事務所だった！？――――連載開始！ドタバタ明るいコメディ系に出来たら、と思ってます。感想、アドバイスｅｔｃ．　なんでも送ってください！※別サイトにて掲載中！！

プロローグ

私は男が苦手だ。

…いや、――――

「大っ嫌いだ。拒絶反応起こしてる」

「えーっ、どうして？」

「いや、普通に考えたらわかるでしょ」

「んー…全く分かんない」

「はぁ…」

理由はたった一つ。

男は身勝手すぎるから。

「似合うと思うのになぁ」

「断固拒否」

「ぶー、せっかく見つけたのに」

「…自分が着ればいいじゃん」

「えーっ、そんなの意味がないよ！」

男なんて、信用できないんだ。

女と遊んでは捨て、遊んでは捨て…

そうやって繰り返して生きてるんだ。

ずっと信用してたお父さんだって…結局そうだった。

帰るのが遅くなったって思えば、浮気。

いつの間にか駆け落ちしてて、出て行った。

私とお母さんの二人を残して。

「第一、私がこんなの着ると思ったの？」

「思ってないけど…」

「けど？」

「…着てほしいなぁ、って」

お母さんは、女手一つで私を育ててくれた。

朝早くから働いて、高校にも行かせてくれて。

おかげで、心から信用できる女友達はたくさんいる。

知り合いの男子なんて…誰ひとりとしていない。

まぁ、女子高だからって事もある。

「こんなヒラヒラのは、可愛い女の子が着るものだよ」
「葵は可愛い女の子じゃん！」
「可愛いってのは、優みたいな子を言うんだよ」
「えー、葵すっごく可愛いのに…もったいないなーっ」

ちょうど今から一年半前、お母さんは亡くなった。
原因は、昔から持ってた心臓病。
息を引き取る瞬間、私は学校だった。
親孝行なんて出来ないまま…

「それ、いくら？」
「んーと…一万三千――――」
「高い。諦めな」
「もーっ、私が買ってあげるよ？」

「いい。遠慮しておく」

優は、唯一事情を知ってる親友。

女の子らしくない私に、すごく優しくしてくれる。

しかも、実は社長令嬢だったりする。

「仕方ない。私の分として買う」

「…どうぞ」

「で、いつか葵にも着てもらう！」

「一生ないと思う」

「もー、可愛い服着たいって思わないの？」

「うん。むしろカッコいい服着たい」

「…そこらへんの男子より、よっぽど男前だもんね」

「それ、褒め言葉として受け取っていい？」

「もちろん！見た目可愛いのに、心すっごく逞しい！」

優といると、時間なんてあっという間。

すっごく楽しい。

多分、今一番の心の支えなんだと思う。

もう、これ以上大切な人を失いたくない…

「そんな引きずってたら、何にも始まんないじゃん！」

ある日突然、優が封筒を渡してきた。

「何、これ？」

「まあ、開けてみて！」

「うん」

中には二枚の便せん…と、カードキー。

「あのさ、葵に頼みがあるの！」

「頼みって？」

「オーディション、受けて！」

「…何の」

「何のって、これに書いてあるやつ」

冗談はやめてほしい。

どう見ても、この事務所は…

あの有名な歌手、俳優が所属してるところ。

しかも女子禁制で有名な。

「何言ってんの？無理に決まってんじゃん」

「何でーっ？」

「だって、この事務所って女ダメだよ」

「知ってるよ？」

「じゃあ、何？私に男になれ！ってか」

「んー…何て言えばいいのかなぁ」

考えて、言葉をまとめたようで…
優がひとつずつ話し始めた。

「うちのお父さんとこの事務所の社長さん、親友なの」
「…何、それ。凄いじゃん」
「それで、聞いた話によると――――」

毎年行ってるオーディションに出ないか、ということ。
もちろんそこには女としてじゃない。
“男”として、だ。

「すぐバレるじゃん！」
「それは大丈夫。社長さんは事情知ってる」
「…どういう？」
「葵が、女の子だって事」

「…なんでオーディション受けないといけないの」

「それは…男嫌い、治してもらうため」

小さい声でそう言った。

「別に、治らなくてもいいって思ってるし」

「いつまでそうしてるつもり？」

「…え？」

「そんな引きずってたら、何にも始まんないじゃん！」

初めてだった。

優がこんなにも怒鳴ったのは。

私のために、そこまで考えてくれてたなんて。

もうこれ以上、心配させたらいけない…

「…受ける。オーディション、受ける」

「…ホント？」

「うん。ホント」

大切な親友にずっと頼りっぱなしじゃダメ。

一生一緒に居られるなんて事、ないんだから。

決心だけは固まった。

ただ…男になり済ますことが出来るか。

背は１６０センチで小さいし。

声も、男からすると高いし。

社長は知っててても、他の人たちは知らないわけで。

そこをどうカバーするかは、自分次第。

もう早速、自分が試されてた。

「で、このカードキーは何？」

「ん？あ、それは…ホテルのカギ」

「どこの」

「…東京、の」

「な、なんで！？」

「だってーっ！オーディション明後日なんだもん！」

「なっ、そ、そんな急に！？」

あとさき考えずに行動しちゃう優。

先が見えそうにありません…。

「ど、ども…んと、よろしく！」

ポニーテール出来るくらいあった髪は、バッサリ。
首元がスースーする。
服、靴など…持ち物は全て優プロデュース。
言葉遣いは直さなくても大丈夫だったみたいで。

「あ、“私”じゃなくて“僕”か“俺”だからね？」
「俺…」
「キャーッ、めっちゃカッコいい！」
「…」
「じゃあ、言ったとおり…」
「落ち着くこと、深呼吸忘れずに、自分を保つこと」

「そう！完璧だよっ」

オーディションの資料審査は通ったらしくて…

これから二次審査。

モデル、俳優、歌手、とまぁ色々な道がある。

それをある程度決定するための審査。

だからほぼ合格決定、ってところ。

「じゃ、終わったら連絡してね？」

「うん」

「“うん”じゃなくて？」

「お、おう」

「ちゃんと意識するんだよーっ」

そう言って、優は会場を後にした。

にしても大きなビル、そしてホール。
周りには…沢山のオーディション受講者。
見てるだけで立ち眩みがする。

「すご…じゃなくて、すげぇ…」

目の前に広がる光景は、未知の世界。
男ばかりのこの場所は、どうも居心地が悪い。
とりあえず受け付けを済ませて、ホールへ入った。

「２７３…２７３…２７…あ、あった」

まだ隣は誰も来てない。
とりあえず、まず一安心。

だんだん人も増えて来た頃、ステージにスクリーンが降りてきた。
そして、画面いっぱいに『第１７期生オーディション』の文字。

「…ぁ、はぁ、はぁ…あ、あった！」

隣の席の人が、来た。
会場は薄暗くなっててて、あまり見えない。
だけど、それは確実に男。
悪寒がしてきた。

「はぁ、はぁ、はぁ…」

息があがったままで一向におさまらない様子。
かなり走ってきたんだろうな…
ふと、目があった。

「…」

「ど、ども…んと、よろしく！」

「…よろしく」

男、だと思う。

ていうか、それしかあり得ない。

なのに、声は高いし、顔立ちも…

何て言うか、とにかく女の子みたいだった。

「名前は？僕は純、佐久間純！」

「俺は…渋谷、葵」

「しぶ、た、に？」

「おう」

「“しぶや”じゃないんだね！」

フレンドリーな男と軽い男、紙一重。

純…とか言う人がどっちなのか、まだ分からない。

≪それでは、オーディション二次審査の説明を始めます≫

コツッ、コツッ、コツッ…

会場が、一気にざわつき始めた。

きっと、この人は社長さん。

だけど演壇に立ってるのは…

「みなさん、こんにちわ。社長の市川佑貴です」

お、女の人！？

「なんかねぇ…女の子みたい！」

眩しいくらいに綺麗な、上品な女の人。
ＨＰで見た名前だから、この人が社長さん。

「みなさん驚いてるようですが、私が社長です」

みんな唖然として見てる。
女子禁制の事務所なのに、社長は女。
しかもめちゃめちゃ綺麗な…
凄い、夢みたいだ。

「――――本日の内容は随時お伝えします」

まずは歌、ダンス、演技力。
それによってコースを決めるみたい。
どれも自信がない…

≪では、カードに書いてある通り動いてください≫

「ねぇ、一緒だよね？」
「おう」
「演技、得意？」
「いや、全然」
「だよねーっ！僕も演技すっごく苦手」
「なんでオーディション受けようとしたの」
「えっとねぇ、友達が勝手に応募してたの」
「ふ～ん」

「渋谷君は？」

「おんなじ感じ」

「そっか！そう言えば、渋谷君見た目可愛いよね」

「はぃ？」

「なんかねぇ…女の子みたい！」

ドキッとした。

ここでもしバレたら…優に申し訳ない。

てか、佐久間君の方がよっぽど可愛いと思う。

本当に男なの？って感じ。

歌唱力審査から始まって、演技力、ダンス…

数人は、なぜか楽器審査があった。

私もその数人のうちの一人。

「何か演奏できる楽器でどうぞ」

そう言われても…

一応、一通りは演奏できます、はい。

小さい頃はピアノ習ってて、中学では吹奏楽部。

主にドラム担当だったけど、時々トランペットとか…

「渋谷君、決まった？」

「…まだ。佐久間君は？」

「僕ギター！」

「ふ～ん…」

今この部屋でオーディションしてるのは八人。

誰ひとりとしてドラムを選択してない。

「渋谷君、ドラム出来るの？」

「一応…」

「すっごい！カッコいい～！」

本当に、佐久間君は女の子じゃ…ない、か。

それぞれ何か得意な曲とか弾いてた。

ドラムは旋律ないから、色んなリズム刻んで…

無事、オーディションは終了。

「受かるといいね！」

「…おう」

「ん？どうかしたの？」

「…なんでもない」

「じゃあ、またね！」

佐久間君は可愛い。

ただの軽い男ってわけじゃなさそう。

最近の中じゃ、一番マシな人っぽかった。

♪～♪～♪～♪～

「あ、優だ。もしもし？」

『もしもし？済んだ？』

「うん」

『じゃ、朝の場所！』

「わかった」

結果が届いたのは、二週間後だった。

「今から事務所に…来れるかしら？」

渋谷　葵　様

オーディションお疲れさまでした。

渋谷　葵　様の結果は

合格　です。

これから我が事務所で

一緒に頑張って行きましょう。

詳細は後ほどお送りいたします。

本当におめでとうございます。

市川　佑貴

オーディションは、見事合格。
後日来た手紙には、社長直々のメッセージが入っていた。

「んと…女の子だけど手加減はしない、だって」
「凄いっ！やっぱ葵は何か持ってる！」
「何かって…」

受かった私以上に、優がはしゃいでた。
この笑顔のために、オーディション受けたんだから。
笑顔を見ると、すごく嬉しかった。

「で、高校どうするの？」
「引っ越し…だと思う。」
「やっぱりそうかぁ…」

「私、お金無いからさ、事務所が提供してくれるって」
「あ、例の寮？」
「うん」
「すごーいっ！有名人たくさんいるじゃん」
「有名人の“卵”だけどね」

で、冬休み中に引っ越すことに。
みんなと一緒に卒業したかったけど…
ダメだったみたい。

優は、引越しの手伝いに毎日来てくれた。
引っ越し当日も、東京まで一緒に来てくれた。
それから一週間、滞在までしてくれて…

知り合いが誰もいない街だったから、ちょっと安心した。

「じゃ、帰るね」

「うん、ありがと」

「…やっぱ葵いないと寂しいーっ！」

「私も優いなきゃダメかも」

「“私”じゃなくて」

「俺。大丈夫かなぁ…」

「大丈夫！電話とかメールとか、たくさんするねっ」

「うん。じゃあ…気をつけて」

空港は、人で賑わってた。

海外旅行に行く人とか、里帰りする人とか。

そんな中で、私と優は…しばしの別れ。

やっぱり、優が見えなくなると不安が押し寄せてきた。

♪～♪～♪～♪～

「…ん？」

知らない番号からの電話。

取るかとらないか悩んでるうちに、切れた。

…と、またかかってきた。

「…もしもし？」

「もしもし、葵君？」

「はい…そうですけど」

「私、市川です」

「し、社長！？」

「そうよ～っ。ナイスリアクションじゃなぁい？」

社長は、意外によく喋る人だった。
色々と話聞かれたり、事務所のこと話したり…
この人は信じられる、そう思った。

「それで、突然なんだけど…来てくれない？」
「は、はい？」
「今から事務所に…来れるかしら？」
「は、はい！」

この時はまだ、デビューなんて想像もしてなくて。
男の中に飛び込んで行くなんて、予想もしてなくて。

「渋谷葵です。高校3年生です。よろしくお願いします」

電車に揺られ、バスに揺られ…

たどり着いたあのビル。

高く、高くそびえ立っている。

「あ、渋谷君！」

「…さ、佐久間君」

「覚えててくれたのーっ？嬉しいーっ」

どうやら、佐久間君も合格したらしい。

何気に話すうちに、同い年って事も分かった。

「で、何で来てるの」
「なんか、社長さんに呼ばれたんだ」
「俺と一緒だ…」
「え、渋谷君も？」
「おう」

エレベーターで最上階まで。
廊下を歩いて、歩いて、歩いたその奥。
やっと社長室が見えてきた。
入口には秘書みたいな人が立ってる。
私たちを見るなり、中に案内してくれた。

「待ってたわよ～っ、葵君と純君！」
「市川社長、こんにちわ」

「あら、そんなかしこまらなくていいのに」
「あの…」
「あ、そうそう。今日呼んだのはね――――」

「「えーっ！？」」
「あら、二人とも息ピッタリ」
「ほ、本当ですか！」
「で、デビューですか？」
「そう。バンドとして」
「バンド…ってことは、他にも？」
「少し前のオーディション受かってる子たちよ」

そう言って、写真を見せられた。
どの人たちも…それぞれ個性があって、イケメン。

優しそうな人もいるし、綺麗な顔立ちの人もいる。
絶対スポーツ好きだな、って人も。

「この人たちですか？」

「そう。今日もこれからここに呼ぶ予定よ」

「先輩方…」

「あ、多分そんな風に思わない方がいいかも」

「えっ？」

ウフッて笑うと、電話をかけだした。
その人たちを、この社長室に呼ぶため。
秘書の人は、また入口に立った。

数十分後、ドアをノックする音が聞こえた。

その途端、緊張が走る。
男が嫌いだから…イケメンも、嫌い。
そんな人たちとバンド組んでデビュー。
しかも、みんな寮生活…
この先が思いやられる。

「どうぞ〜」
「失礼しますっ！」
「佑貴社長、お久しぶりです！」
「ん、お久しぶり。相変わらず元気ねぇ」
「そりゃ勿論ですよ！なんたって今日は…」
「朝、大好物のカレーだったんです」
「あら、それは良かったわね」
それだけでテンション上がるなんて…

ていうか、ここに五人も入ってきた。
それに私と佐久間君だから…メンバー七人！？
社長、男嫌い知ってて…

「で、用件ってのは何ですか？」
「彼方たち、デビューが決まったの！」
「ホンマですか！」
「すごいっ！デビューだって！」
「この二人もメンバーに加えるのよ」

一気に視線が集まる。
痛い…怖い…でも、引き下がるわけにはいかない。
社長さんのためにも、優のためにも、お母さんのためにも。
頑張って行かなきゃ、何にも始まらない。

「佐久間純ですっ！１８歳ですっ！高校３年生ですっ！」

「渋谷葵です。高校３年生です。よろしくお願いします」

「純君は元気やし、葵君は礼儀正しいし」

「これからよろしくな！」

「俺、先輩になったぁ！」

明るい人たちだって事は分かった。

きっと、本当はいい人なんだと…思う。

でもやっぱり心のどこかで拒絶してしまってる。

この男嫌いは、なかなか治らないんじゃないか…

「俺は…男だぁぁぁあ！」

「俺らも自己紹介しないと！」

そう言って、早速自己紹介が始まった。

立ってる順番、左から…

「高橋風太です。こん中では最年長の２４歳です」

イントネーションが、もろ関西。

目がクリックリしてて、身長もそこそこ高い。

「コイツは唯一の関西人」

「時々関西弁になるかも分からん」
「俺、星大智。一応この関西人と同い年」
スッとした感じで、黒縁メガネかけてる。
インテリっぽい感じだけど、堅苦しさがない。
「お、大谷真司郎、２３歳！」
「コイツは、よく緊張する…言わばど素人！」
確かに、はじめちょっとだけテンパってた。
私と身長がほとんど変わんないと思う。
「早坂直人ですっ！２１歳ですっ！よろしくね？」
「コイツはこう見えても男」
「こう見えてもって何～っ」

ここにもいた、男女が。

佐久間君に加えて、この早坂っていう人まで…

意外と、このメンバーだと女って事バレないかも。

だから社長さんは選んでくれたのかな？

「成瀬留依、１９…来月２０歳！後輩が出来て嬉しいですっ！」

きっと一番身長高い…と思う。

だけど無邪気な雰囲気漂う少年のよう。

みんなそれぞれ個性が強い。

そしてこのグループ、世間的にはイケメン揃い。

ターゲットは中高生が主。

これからバラエティとかドラマとか…

色々出演していくらしい。

「と言うことで、ＣＤデビューの予定もあるから」

「バンドって言ってたよなぁ」

「純と葵は何か楽器できるの？」

可愛い顔して男女…早坂さんが聞いてくる。

やっぱり、この人こそ女の子だ。

「僕ギター弾けます！渋谷君はドラムです！」

代弁してもらった…

ていうか、佐久間君は人のことまで話過ぎ！

ある意味要注意人物だな、きっと。

「そっか！俺もギターだよ」

「俺キーボード」

「べ、ベース！」

「俺は主にパーカッション」

「…一応、ギター…とか？」

おいおい、最後の高橋さん…大丈夫か？

で、結局担当はこう。

ギターが高橋さん、成瀬さん、佐久間君。

ベースが大谷さん、キーボードが早坂さん。

パーカッションが星さん、そしてドラムが私。

ボーカルは高橋さんがメインって言ってた。

「じゃ、あとは寮で結成記念パーティーでもしたら？」

「おぉ！それいいですね！」

「じゃあ寮でパーっとやっちゃいますか！」

成人組、異様にテンションが高くなった。

お酒飲めない未成年組…それを見守るしか出来ず。

こうして、メンバー…しかも男たちとの生活が始まった。

仮に、もしバレてしまったら…

想像するだけでも、恐ろしくてたまらない。

これからは男。

「俺は…男だぁぁぁあ！」

「え、渋谷君、大丈夫…？」

「可愛い顔して、かなり面白い奴！」

「あれって、独り言？」

「男って…当たり前やんなぁ」

少し離れたところでは…

佐久間君には心配されの。

高橋さん、早坂さん、成瀬さんに変人に思われの。

メンバーと、社長さんと秘書さん。

みんなが笑ってた。

「あ、俺部屋となりだから、よろしく！」

メンバー全員で、スーパーで買い物。
成人組のみなさんは…お酒コーナーへ一直線。
仕方ないから、未成年組で食料調達。

「うー、来月まで我慢、来月まで我慢…」

来月誕生日を迎えるらしい成瀬さんは、ブツブツ文句。
しかも、言いながらお菓子を大量にかごの中へ。
主にチョコレート系のお菓子ばっかり。

「渋谷くーん、飲み物何がいいー？」

「…お茶で」

「ジュースじゃなくていいのーっ？」

「…頼むから、叫ばないで」

遠くのコーナーから叫んでくる佐久間君。

周りからしてみれば、いい迷惑だ。

それを無自覚でやってるあたり、すごい。

「あとこれと、これ、これ…葵君お菓子選ばないの？」

「何でも食べれるから…成瀬さん選んでください」

「俺セレクトで大丈夫？」

「はい、大丈夫です」

そう言うと、またお菓子選びに夢中になってた。

どんだけ少年の心を持った人なのか…

で、ジュース選んでた佐久間君が帰ってきた。

「はいっ！これだけあれば不自由ないよねっ」

両手のかごいっぱいのペットボトルと缶。

炭酸飲料は少なめで、なんか甘いものばっかり…

「あれ、お茶は？」

「…あっ！忘れてた！もっかい行ってくる！」

あれだけ大声で聞いておいて、忘れてくるとは…。

変な人、ホント女の子みたい。

それは言動も行動も性格も…見た目も。

「今日は佑貴社長のおごりだってーっ！」

「じゃ、俺払ってくるわ」

荷物は大量になり過ぎて、重かった。

両手合わせて袋が三つ。

そのうち二つは、ジュースのペットボトル。

重くない食料が入ってる袋は…四つとも成瀬さん。

とてつもなく大事そうに持ってる。

「そう言えば、この棟は俺ら専用なんやって」

「へぇ、すごいな」

「二人はもう部屋決まってるん？」

「はいっ！僕一階の真ん中です！」

「葵君は？」

「二階の一番奥です」

「えらいバラバラやなぁ」

「早く俺たちも決めたい！」

オートロックの玄関に着くなり、いきなり部屋割を決め出した。

なんて自由な人たち…

「僕たちは、荷物置きに行こ？」

「…おう」

部屋は、青と黄色で統一された家具が置いてある。

色の組み合わせは…優プロデュース。

派手な感じだけど、意外と気に入ってる。

「はぁ…やっぱ七人は多すぎると思う…」

あんな人たちとこれから過ごせ、と？
本当だったら、断るに決まってる。
断れない理由は、もちろん今まで支えてくれた人たち。
はやく独り立ちして、心配掛けさせたくない。
優に頼りっぱなしじゃ、ダメ。

「…あれ、開いてる。おーい、葵君」
「う、うわぁ！」
「何今の驚き方」
部屋に入ってきたのは、星さんだった。
しかも、結構爆笑してる。
「…笑わないで下さいよ、驚いただけだし」

「いやぁ、やけに女っぽかったから」

ば、バレた…？

心配はいらなかった。

別に、女とバレたわけではなかったみたい。

その証拠に、未だにケタケタ笑ってる。

…第一印象、ほぼ崩壊。

この人は全然インテリなんかじゃない。

むしろ…どこか抜けてる感じ。

「…用事、何かあったんじゃないですか？」

「ん？特に用事はなかったけど」

超気まぐれな人でもあった。

「あ、俺部屋となりだから、よろしく！」

「よろしくお願いします」

「あとは…あ、敬語使ったりしなくていいから」

それから付け足すように、名前の呼び方を指定してきた。

それは…大智。

あまりに普通すぎて、笑ってしまった。

「じゃ、ちー君って呼びます…じゃなくて、呼ぶ」

「ち、ちー君！？」

「だって、最後の文字ちだから」

「…好きにしてくれ」

何気にいじけてしまった。

聞くと、他のメンバーも呼び捨てしてくれないらしい。

それだけの理由でしょげるちー君、まさに子供。

心を許したわけじゃないけど…

何となく、話しやすい人だ。

「では改めて。デビュー決定、かんぱ～いっ！」

しばらく談笑してると、高橋さんが呼びに来た。

「そろそろ始めるぞ～…って、何でお前もいんねん！」

「部屋隣だし、遊びに来てた」

「そか。はよ来いよ～」

そう言ってまたどっか行った。

自己紹介の時以上に関西色が強烈。

見た目すごく可愛い感じなのに、喋りが…

ギャップが凄い。

「って、どこに行けば…？」

「あぁ、一階の一番入口に近い部屋」

「なんで？」

「そこ、誰も使わない部屋だから、みんな専用ってこと」

「なるほど…」

一応部屋のかぎを閉めて、みんなのいる一号室へ。

ちなみに、私の部屋は八号室。

部屋に入ると、すでに大谷さんは…出来上がっていた。

高橋さんも早坂さんも、ちょうどビールに口付けたところ。

それを羨ましそうに見てるのが、成瀬さん。

「遅いよぉ！」

「てか、真司郎もう出来上がってるじゃん」

「コイツ酒弱いねん！」

「んー？んふふっ」

「もー、気持ち悪いっ！」

ベロベロに近い大谷さんは、高橋さんにベッタリ。

あの緊張してる姿はどこへ行った事やら…

「あーっ、もう！俺も飲みたいっ！」

「お前は来月まで待たんかいっ！」

「あと一カ月の辛抱だから、ね？」

「自分たちは飲めるからって…この男女」

「ち、ちょっと！男女って…留依酷いっ！」

もともと事務所に所属してた五人は、かなり仲良し。
そして佐久間君も、すぐ溶け込んで行ってる。
…ついて行けてない、私。
このまま取り残されそうで、何気に不安が押し寄せてくる。

「はぁ…」
「何ため息ついてんの？」
「えっ、い、いや、その…」
「…つまんない？」
「いえっ！すっごく楽しいです！」

顔を近づけて聞いてくる成瀬さん。
嫌じゃないのに拒否してしまう…怖い。
せっかく心配してくれてるのに、心がなかなか開けない。

こういう状況にも慣れてないし、なんせバレたら…

「…そう？なら、これあげる」

「…チョコ、ですか？」

「うん。これ、すっごく美味しいから！」

「ありがとうございます」

「あ、タメなしね！あと俺の名前は“留依”って呼んで？」

「留依…君」

「やっぱまだ慣れなきゃ無理だよね」

そう言ってフニャって笑う。

なんていうか…他の人とはまたオーラが違うって感じ。

そこだけ時間がゆっくり進んでるみたい。

少年のようで、のんびりとした雰囲気を醸し出してて。

「では改めて。デビュー決定、かんぱ～いっ！」

「「かんぱーいっ！」」

長い長い結成記念パーティーが始まった。

「成人組は酔いつぶれて、純は…おいてきた」

時刻は午後十時をまわった。

七時から始まったから…開始から三時間経過。

大谷さんはさっきから爆睡してる。

しかも、佐久間君の膝枕で…。

初めからとばしてたし、まぁ仕方がない。

で、高橋さんと早坂さんも結構お酒まわってる。

その二人に無理やり飲まされてるちー君。

留依君は、隣でコックリコックリ…眠そう。

「ほーら、お前も飲まんかいっ！」

「ほっしー、もっと飲んでよぉ」

「俺酒弱いから…って、あーっ！もう注ぐなって！」

「うー…真司郎君、足痺れてきたぁ」

「スー…スー…」

「足ジンジンするーっ」

「…んはっ！ビックリした」

「ん？」

「あれ、今俺呼ばなかった？」

「呼んでないけど」

「なんだ、夢か…」

私も眠くなってきた…。

いったん、部屋に帰ろうかな。

「あれ、葵。どこ行くねん」

「えっと、いったん部屋でシャワー浴びようかと…」

「ここで浴びればええやん」

「いや、着替えが部屋に…」

「あー、ほんならはよ行って来い」

酔うと関西色増すのかな、高橋さんって。

…佐久間君が足の痺れ切らしてわめいてる。

ガチャ…

部屋はやっぱり静かで、何より男に囲まれてないから落ち着く。

急いで着替えをとって、風呂場へ行った。

かぎ、閉めるの忘れてるのに気付かず…。

ガチャ…バタンッ！

「ふえっ！」

確かにドアの音がした。

隣のちー君かなぁって思ったけど…違う。

足音がだんだん近づいてきて…遠ざかってく。

風呂場に鍵がついててよかったって思う。

もし開けられたら…最悪だ。

急いで着替えて、恐るおそるリビングに向かった。

…そこに居たのは、留依君だった。

「る、留依君？」

「あ、勝手にお邪魔してるー」

そう言いながら、さっきのチョコを口に投げ込んだ。
お菓子とジュース持ってきてるし…。

「みんな、は？」

「成人組は酔いつぶれて、純は…おいてきた」

そう言ってまたフニャって。

結構キツイ発言したよ、今。

「で、なんでここいるの」

「さっきちー君が部屋綺麗って言ってたから」

「なるほど…」

なおもお菓子…主にチョコをほおばっている。

リスみたいにほっぺはパンパン。

時々オレンジジュースを飲んでて…完璧子供じゃん。

「うわぁぁぁあ！ファーストキスがぁぁぁあ！」

「なぁ、正直に答えてよ？」

「ん？何が」

「葵は…女の子？」

かなり驚いた。

だから、すぐ返事することも出来なくて。

…きっと、バレてしまった。

「な、なんで？そんなわけ――――」

「女の子、でしょ？」

何でそこまで言い切れるのか分からない。
他のみんなは「女の子みたい」で済ませるのに。
留依君、かなり要注意人物だったんだ…。

「…何で？」
「んー、雰囲気が何となく」
「雰囲気？それだけで女の子って決めつけるのは――――」
「じゃあ、今俺が“脱いで”って言ったら、脱げる？」
「…」
「…やっぱり」

バレた。
しかも、これから一緒にデビューするメンバーに。
優、社長さん、ごめんなさい…
こんなに早くバレてしまうなんて…。

「…誰にも、言わないで？」

「そうするつもり。なんか理由あるやろ、きっと」

「…うん」

「メンバーにも言わない方がいい？」

「…出来れば、そうしてほしい」

あー、どうしよう。

誰にも言わない、とは言ってるけど…

何時バラされるか分からない。

男は信用できない生き物だから。

「そう言えば、ドラム出来るんだって？」

「うん」

「へぇ、カッコいい！軽音部とかだった？」

「そうじゃなくて…吹奏楽部で、時々」

「今の吹奏楽部は凄いなぁ」

話、変えてくれた…

「…みんなのところ、戻らないと」

「ん、そうだね。戻ろっか！」

何て言うか…今まで出会ってきた人たちとは違う。

実際、私がここまで男と話せる自体凄いと思う。

それは、なぜかこの人たちは話しやすいって言うか…

だから、きっと社長さんはこのメンバーにしたんだと思う。

「あー、遅いっ！」

「ゴメン、なさい」
「もー、ほんならこれで許したるわ」
「――――…！！」
「あーっ！ち、ちょっと、風君何してんの！」
「何って、ちゅーやけど？」
「な、ちゅーって…」
「お前もちゅー、したかったんか？」
「そ、そうじゃなくて！…って、あれ、葵？」

ありえない…ありえない…
なに、これ。
信じられない…
こんなあっけなく私の…
「うわぁぁぁあ！ファーストキスがぁぁぁあ！」

あー、涙が出てくる。
やっぱり、男って信用できない。

「お前、初めてやったんか！？」
「初ちゅーが男って、嫌だよねー…可哀そう」
「葵君、だ、大丈夫？…あっ！気ぃ失った！」
「ち、ちょっと、葵！？」

はぁ…大変。
信じられない、うん、信じたくない。
あっけなく私のファーストキスは奪われた。
しかも、相手は私を男って思ってるわけで。
これは確実におふざけでしょ。
最悪、最低…。

「お、俺、葵部屋に運んでくる！」

「えー、留依頼りないーっ」

「…男女よりマシだと思います」

「る、留依、ひどい…」

結局、私は気を失ってしまったみたいで…

最後に聞こえた声は――――

「ったく、風君…コイツ女やってば」

「すっごく優しくて、カッコよくて…葵みたい！」

夢を見た。

みんな楽しそうに喋って、笑ってる。

お父さんもお母さんも、私も。

でもそれは途中からザー…ってなって…

真っ暗になった。

目の前が、何にもない真っ暗な空間。

ふと、あたたかくなる。

目の前が、フワーッと明るくなってく…

「…ん……」

「あ、葵！」

「…ん？」

「もー、下で気ぃ失ったんだよ？」

「え…、あぁぁぁあ！」

全部思い出した。

私、ファーストキス奪われちゃったんだ。

「みんなもう一号室で寝ちゃったから」

「そう…あ、あの」

「ん？」

「ありがと」

「だって、女って知ってんの俺だけじゃん」

「…」

「あ、そう言えばさっき随分うなされてたよ」

「え、あ…」

「泣いてたし」

目を拭ってみると、確かに濡れていた。

あんな夢で泣いてたんだ…私。

でも最後、なんかあったかかったなぁ…

「ねぇ…寝た？」

「んー…ちょっと？」

「ちょっとって…寝た方が、いいと思う」

「だって、まだ部屋に荷物届いてないし」

「あ、そっか…」

「下は酒臭いもん」

「あぁ、なるほど…って、え？」

「俺、ここで寝るーっ」

そう言って、ベッドにダイブしてきた。
上にドシッ！て…重たい。

「お、重たい…苦しい…」

ヤバい、震えてきた。
やっぱり何処かで拒絶反応起こしてる。
嫌だ…怖い…

「…もしかして、男嫌い、だったり？」
「っ！」
「ふ～ん。何でオーディション受けたの」
「そ、それは…」
「男嫌いなのに、男ばっかりの事務所。可笑しくない？」

「だ、だって…」

「だって、何？」

こ、怖い…

助けて…優…

♪～♪～♪～♪～

「あ、あの…その…」

「ケータイ、鳴ってるよ？」

「あ…優」

心の叫び、通じたのかな…？

優から電話がかかってきた。

震えが止まらないまま、通話ボタンを押した。

『もしもーし！葵ちゃんですかぁ？』

「…うん」

『あれ、元気ないねぇ？』

「だ、大丈夫だよ！すっごく元気！」

『そうかなー？あ、そうそう』

「どうした？」

『あのね、聞いて！私、彼氏できたのーっ！』

「…」

驚きのあまり、言葉が出てこなかった。

今まで、優はずっと私にベッタリだった。

どこにでもついてくるような感じ。

だけど…彼氏が出来た、って。

もう、優に私は必要ない…？

『あれ？葵、大丈夫？』

「あ、うん。よかったじゃん」

『すっごく優しくて、カッコよくて…葵みたい！』

「わ、私？」

『うん。葵いなくなって、寂しかったんだから』

「…私も、優いなくて寂しい。ていうか、辛い」

『…やっぱり、何かあった？』

優は、私以上に私のこと知ってる。

だからきっと、もう分かってる。

「だ、大丈夫だよ。うん、本当に」

『…そっか。ま、話せるようになったら相談してよ？』

「…うん、もちろん！」

『じゃあ、社長さんによろしくね！』

「わかった。じゃあね」

電話中、留依君はずーっと静かだった。

よく見ると…寝てる。

スースー寝息立てながら、天使みたいな寝顔で。

「…寝てる時は怖くないのに」

すっかり目が覚めてしまった。

時計を見ると午前三時半過ぎで。

面白いテレビもないし、新聞もないし。

温かいココアを飲んだ。

「な、それ？てかムードぶち壊しじゃん！」

男は所詮、信用できない生き物。
お母さんと私を見捨てたんだから。
あのときから、私は決めた。
お母さんを支えられるように、逞しくなる。
誰にも、弱音なんて…吐かないんだから。

「んー……あれ、葵…？」
「…ん？」

やっと起きてきたよ、コイツ。
あれからずーっと、私のベッドで爆睡。

よくやるよ…

「俺ベッド占領してた…ゴメン」

「…いーよ、別に」

「…あれから寝た？」

「寝てない。ずっと起きてる」

「…ゴメンなぁ」

「許さない」

「ふぇっ！？」

「…とか言ったら、どうする？」

「ちょ、お前！」

なんでだろう…？

こうやって普通に喋れてる。

一緒の空間に居ても、そこまで拒絶してない。

むしろ…なんとなく、安心してる。

「変な反応だったね、ふぇっ！？って」

「それは仕方ないって！本当に怒ったと思ったんだし」

「アハハ」

「あ、笑った」

そう言って、またフニャって笑う。

何とも言えないオーラが、また私を包む。

なんでだろう…？

この笑顔、すごく落ち着く…

「…やっぱ、私ってそんなに笑ってなかった？」

「うーん、少なくとも俺が出会ってからは」

「…私、本当に男が嫌い」

「うん」

「身勝手すぎるし、信用できないし」

「…うん」

「簡単に人を裏切るんだから…大っ嫌い」

「…」

あー、なんで話しちゃってるんだろう？

「お母さんは、お父さんのせいで死んじゃったんだよ」

「…うん」

「信じられないよね、一番信用してた人なのに」

話してるうちに、涙が溢れてきた。

小さい頃についた心の傷。

これはきっと、治るのにとてつもなく時間がかかる。

「…さっきは、本当にゴメン」

「いいよ。本当に誰も信用できないんだから、男は」

「…そっか」

ギュッ

突然、ギュッて…抱きしめられた。

でも、震えたりしなかった。

すごくあったかくて、心地いい。

「…多分、このメンバーは大丈夫、だと思う」

「ん？」

「初めて見たとき、あんまり拒絶しなかった」

「…俺ら、多分他の人たちとはちょっと違うから」

「うん、すっごく違う。…みんなバカで変だし」
「な、それ？てかムードぶち壊しじゃん！」

きっと、この人たちなら大丈夫。
いつか絶対、拒絶しなくなる日が来る。
…って心から思う。

「あのさ、本当に女って事黙ってて」
「わかってる」
「俺は男。どんなことだってチャレンジする」
「男っぽいし、バレないと思うよ！」
「それは中々複雑な気分…」

私…俺は、渋谷葵、１８歳。
これから、男たちの中で生活していきます。

そして、絶対に克服してやるんだ。

お母さんのためと、優のために。

「でしょでしょ！ほら、分かる人には分かるんだって！」

翌日。

みんな自分の部屋に荷物を運んでるんだけど…

「あーっ、二日酔いキツイっ！」

「うっさいわ！頭に響くっちゅーねん！」

「二人とも五月蠅いよぉ…」

「「は？」」

「…ご、ごめんなさい」

高橋さんとちー君、すごく息ピッタシ。

それより、毎回早坂さんの扱いが酷い気が…。

「ねぇ、昨日大丈夫だった？」
「ん？」
「ほら、その、風太君に…」
「あー、大丈夫。平気、平気」
「すっごく心配したんだから！突然気ぃ失っちゃうし」
「…ゴメンな？」
「とりあえず、よかった！」

何て言うか…佐久間君、本当に女の子みたい。
実際こんな感じの女友達、居たもん。

「ほら、純！次これ！」
「は、はいっ！」

昨日から以上に二人の仲がいい。

ま、まさか…！

「大谷さんと佐久間君、デキてる…とか」

「何言ってんの。二人は男同士だし」

「でも…絶対昨日何かあったと思う」

「何かって…」

そう言って、いつもとは違い、大口開けて笑った。

いろんな表情があって…

初めて、男の人を見て“面白い”って思った。

「…あ、これどこ？」

「んー、それ窓の所置いてて」

「分かった。これは？」

「それは…俺のじゃない。多分ハヤの」

「ん、了解」

七人で片付けしてくと、すぐ終わった。

同じ窓りなはずなのに、それぞれに個性があって…

うん、面白い。

それにしても…

「なぁ、これはどうよ」

「お前、女じゃないんだから」

「えー、でもこれよくない？」

「だからって…ウサギのぬいぐるみ、多すぎだろ」

「うわぁ！可愛いっ！」

「でしょでしょ！ほら、分かる人には分かるんだって！」

早坂さんの部屋には、たくさんのウサギのぬいぐるみ。
まるで女の子の部屋みたい。
で、メンバーは文句言ってたのに…一人だけ。
佐久間君だけ、早坂さんの気持ち分かってた。
やっぱりこの二人って、実は…ゲイ？
雰囲気何となくそうだけど…それはないか。

「ほな、終わったことやし…ゲームしよ！」
「ゲームって、まさか…」
「恒例の王様ゲーム！パチパチパチ」
「「…はい？」」
「あー、二人は知らないよね」
「なんか、コイツ王様ゲーム好きでさ」
「何かとこうやって始めるんだ」

「女の子居ないと楽しくないって言ってるんだけどね」

な、なんだ、これは！

今まで見たことないくらい楽しそうな高橋さんの姿が…。

すっごくノリノリで割りばしに番号書いてるし。

あ、星さんが割りばし割るの失敗した。

…高橋さん、凄い剣幕で文句言ってるし。

それより…王様ゲームって、何？

「でわでわ。王様だーれだっ！」

ツンツン

「ん、どした？」

「…王様ゲームって、何？」

「えぇぇぇっ！…お、王様ゲーム、知らないの？」

「え、まぁ…うん」

すっごく驚かれた。

そんなに有名なゲームなの…？

なに、テレビゲームとかじゃなくて…？

「王様引いた人の言うことは絶対」

「…なに、命令？」

「そんな感じ。あ、でも番号で指示されるから」

「…よく分かんない」

「まぁ、やってくうちに分かると思うよ」

そんな感じで、軽い気持ちで臨んでみた。

けど…

「え、な、うわっ！」

軽い気持ちじゃ、ダメだったみたい。

現に、今目の前では…

「えー、命令だもーん」

「ち、お前酒入ってるんじゃ…うわぁっ！」

ちー君が、大谷さんに襲われてます。

え、こんなゲームなの？

すっごく危険じゃん。

あの、一応…女の子なんですけど！

「ち、ちょっと！」

「ん？」

「軽い気持ちで臨んじゃダメじゃん」

「んー、そうだけど…当たらなければいいわけだし」

「でも…うわぁっ！」

ちー君が、大谷さんに脱がされました。

あ、上半身だけね。

「葵には刺激が強すぎるな…」

「もぉ…最悪」

こっそり抜けようとしたけど…

「葵、抜けたらアカンよ！」

高橋さん、そこはスルーしてほしかった…

結局、抜ける事出来ず。

え、女の子居ないとつまんないって…大変じゃん！

普段どんなことしてんのよ、この人たち！

最悪だ…。

やっぱ男って、遊んでは捨て…の繰り返し、か。

「じゃ、第四ラウンドーっ！」

「引いて引いてー」

「でわでわ。王様だーれだっ！」

「はいっ！俺！」

何気に危険な高橋さん…王様なっちゃった。

これ、絶対危ないよね、うん。

「ほなな…五番の人が、三番の人に……ちゅーする！」

「お前ホントちゅー好きだよな」

「あ、もちろん口同士な～」

…無視、してやるか。

うん、そうしよう。

だって、だって！

割りばし見ると、ひらがなで“さん”って…

え、これ、三番って事だよね…？

ありえない、ありえない。

嘘ついて抜けようかな…

「三番誰〜？」

「お前が五番か？」

「もー、これでハヤとかじゃ嫌やし」

「留依君酷い…うぅぅ…」

はぁ…また最悪な結果じゃん。

これ、女って知ってる留依君じゃん。

もう、どうしよう…

「三番〜…葵？」

「渋谷君なの？」

「葵か！ほなあっつーいちゅーしてやってや、留依」

「…。じゃ、あっつーいちゅーします！」

はぁ、乗りやがった。

最悪だ、もう。

生きてる心地がしない…

いいんだ。

これからは男なんだから。

これくらい、我慢だ、我慢。

「それではぁ、さんっ！にーっ！いちっ！ハイっ！」

覚悟…って、あれ？

まったく感触ない…触れて、ない？

恐るおそる、目を開けてみた。

「うおぉぉぉ！長ーっ！」

え、全く触れてないよ？

もしかして…

「ハイ終了ーっ！」

「留依長かったな！」

「なんか…葵女っぽいやん。ポーしとる」

「でもなんか…すっごい殺気立ってる、よ？」

コイツ等、調子乗りやがって。

多分、留依君は角度的にそう見えるようにしたんだと思う。

女だって事、知ってるから。

「じゃ、第五ラウンドーっ！」

「イエーイっ！」

それ以降、当たる事はなかった。

ていうか、王様になったのがほとんど留依君で…

気付いた。

わざと王様引けるように、割りばしに傷入れてるって事。

あと、毎回私の番号チラ見してたって事。

「ここ、私の部屋なんだけど！」

あの後、結局第二十ラウンドまで続いた…。

その時一度も当たることなく。

卑怯だけど、細工してくれた留依君には感謝しなきゃ。

…男の人に感謝するのって、初めてかも。

「あー、もうこんな時間や」

「僕、もう眠いです…」

「俺も眠いー」

「じゃ、みんな寝るか！」

王様ゲームの後、みんなでコンビニ弁当食べた。

案外、カルビ弁当美味しかった。

で、やっと解放されたのが夜の十時過ぎ。

それからお風呂入って、歯磨きして、ニュース見て…

トントントン…

「…は、はい…？」

「俺ー」

「…オレオレ詐欺ですか？」

「もー、留依ー」

遅くに部屋にやってきたのは、留依君だった。

「…何の用でしょうか」

「もー冷たいなぁ。これ、買ってきた」

そう言って、ビニール袋を見せた。
中には沢山の…チョコレートたち。

「わざわざ…チョコレート」
「これ、新製品出てたから、思わず買った！」
「…」

あまりの子供っぽさに、ちょっと呆れた。
年上なのかさえ分からなくなる。
いつの間にか、警戒心だけは無くなってた。

「さっきこれ買いに行った時、社長さんに会った」

「社長って…市川社長？」

「うん。社長さんは、女って事知ってんの？」

「…うん」

「そっか。それ相応の事情があるわけね」

「…うん。あのさ」

「ん？」

「さっきは、その…あ、ありがとう」

「あー、あれね。風君も無茶言うよねー」

食べながら会話してる…

こんなに食べてても太らないなんて、羨ましい。

それからずーっと他愛もない話してて…

いつの間にか、日付が変わってた。

「あのー…そろそろ、眠いです」

「あ、もうこんな時間かぁ…じゃ、寝よう」

「うん」

「…」

「…」

「あの…まさかとは思うんだけど…」

私がそう言うと、すっごく明るくニコーッて…

何、悪い予感的中、みたいな？

なんか、もうすでに私のベッド占領してますよ、はい。

これもう、確実にここで寝る気満々じゃん。

「じゃあ、お休みーっ」

「ち、ちょっと！わ、私どこで寝ればいいの！」

「んー、どこがいい？」

「ここ、私の部屋なんだけど！」

「じゃあ…はい、どーぞ」

意味が分かりません。

え、まさか隣で寝ろ、と？

ありえません。

だって、ほら、その…

一応ね、女って知ってるんでしょ？

「…床で寝る」

「えー、それダメ！凍えちゃう！」

「じゃあベッド返してよ」

「だからぁ、隣で寝ていーよって」

「…やっぱり床で寝る」

「もー！」

「う、うわぁっ！」

何、ギューって…絞殺されそう。
私、決して抱き枕じゃないんだけど。
…何言っても無駄、なのかな。

「スー…スー…」
「…ねちゃってるし」

襲われるよりかはマシか、って思うことにした。
この腕の中から抜けだそうとしても、無理。
力強いし、足まで固定されてるし。
はぁ…最悪だ。
この人、さっぱり分かんない。
ただ、言えるのは…無自覚ってこと。

「…なんかまた不思議ちゃんおったぞ」

初めはどうなる事やらと思ったけど。

結構始まったらスムーズに行くものらしい。

無事レコーディングも済み、プロモ撮影も済み…

今日は、デビュー記念の番組出演です。

「…って、誰に対して話してるんだろ、俺」

「葵ー、おるんかー？」

「はーい、居りますよー」

「衣装着替えるぞー」

「あ…は、はーい」

ここからが大変なわけで。
楽屋は小さくて、みんなギューギューで着替えてる。
そんな中で着替えたら…バレるかも。

「葵、俺らトイレで着替える？」
「え、あ…うん。そうする」

留依君は、何かとフォローしてくれてる。
トイレ…一応、男子トイレ使わなきゃいけないんだよね。
もちろん、個室じゃなきゃダメなわけで…
でも、最初よりは抵抗なく入れるようになった。
これも大きな進歩なのかな。

「葵ーっ！これ、手伝って？」

「あ、うん」

純君は…最近、彼女みたいに付きまとってくる。

でも何気に可愛いから…許す。

で、それに負けず劣らずなのが、直人君。

ちー君にベッタリで…これぞまさにカップル。

危ない匂いがする…

「よーし、じゃ行くか！」

初めての収録。

ゴールデンタイムで視聴率も高い音楽番組。

緊張する…

ちゃんと、間違わずにドラムたたける。

音外さずにコーラスできる。

…って、自分に言い聞かせた。

音楽番組とは言っても、トークとか色々ある。

バラエティのジャンルに属してるのかも。

司会は人気のベテラン芸人二人組。

確か…風太君、尊敬してるって言ってたっけ。

「はいでは…あ、デビューホヤホヤなんやて」

「へぇ〜、男七人組のグループ。しかもイケメン、って」

「じゃ呼びしましょう！今夜のゲストはこの方たちです！」

緊張はピークに達する。

照明が眩しくて、人がすごく沢山で…

「「キャーッ！」」

「はい、Ｈｉｇｈ－Ｔの皆さんでーす」

「「こんばんわー」」

「え、みんないくつ？」

「若いな。年齢込みで自己紹介してよ」

台本に自己紹介って書いてあったけど…

みんな、何て言うのかな？

聞いておけばよかった。

「あ、じゃあ俺から。高橋風太、最年長２４歳です」

「えー、２４が最年長！？」

「え、じゃ他は？」

「星大智、同じく２４歳です」

意外とみんな普通だな…

「お、大谷真司郎、２３歳、です」

「はぃ早坂直人、２１歳です！」

「なんや、女みたいな言い方やな」

「そうですか？」

「コイツ、いっつもこうなんです」

「なに、これなんか？」

「違いますよ！ちゃんと男です！」

イジられてる…。

直人君、全国の人たちに疑惑持たれたと思うよ、うん。

「じゃ次！」

「はいっ、成瀬留依、来週２０歳になります！」

「おー、おめでとう」

「ありがとうございますっ！」

「なんや年齢だけじゃ飽きたな」

「な」

「じゃあ、好きなタイプ聞こか」

あ、なんか加わった…

てか好きなタイプって…私、女だもんなぁ…。

「好きなタイプは…可愛くてしっかりした子です！」

「理想高いな～」

「じゃあ、次」

「佐久間純、１８歳ですっ」

「じ、１８！？」

「はいっ」

「君も可愛いなぁ」
「じゃ、好きなタイプ」
「好きなタイプは変わった子です！」
「…なんかまた不思議ちゃんおったぞ」

純君もイジられてる…。
やっぱ、二人は似てるんだ。
今日また改めて確信した、うん。

「じゃ～最後」
「はい、渋谷葵、１８歳です」
「君も１８かいな！」
「君も可愛いなぁ。タイプは？」
「タイプは…た、頼れる、人？」
「俺、頼れるで！」

「お前こそどっちの人間か分からんやん！」

やっぱ、この二人すごい。

まだ緊張はしてるけど…

会場の空気とか、自分のモチベーションとか。

全部和らいで、最初より楽になってきた。

まだまだトークは始まったばかり…

「確かに…めちゃめちゃカッコよかった！」

私は二列目の一番端。

成人組が前列に座ってる。

で、関西弁丸出しで風太君が話してて…

ちー君が冷静につっこんでる、って感じ。

何もしなくても進んで行ってるってこと。

意外と楽だな、うん。

「なに、やっぱりゲイなの？」

「違いますってぇ！」

「えっと…早坂君と佐久間君？」

「聞くところによると、部屋があれなんやろ？」

「あー、コイツの部屋ウサギのぬいぐるみありますよ」
「ほら～、やっぱり…ゲイ？」
「ちがいますーっ」

この話でここまで盛り上がるとは…ね。

「では、歌のスタンバイお願いしまーす」
「ちゃんと男かどうか見とくわ」
「だから男ですって、ねぇ？」
「うん、僕ら男です！」

最後までイジり続けられた二人。
確かに女々しいところあるけど…
きっと、バンド見るとみんな考え変わると思う。
なんたって、二人は凄くカッコよくなっちゃうんだから。

緊張は最高潮。

心臓がバクバク…って。

直人君、さっきと目の色が違う。

純君も、音合わせ真剣にしてる。

真司郎君と風太君は、スタッフさんと話してる。

ちー君は位置の最終確認。

留依君は…あ、やっと来た。

さっきまで、楽屋にピック取りに行ってた。

私のカウントから始まる。

もう、たたきだしたら止まらない。

みんなもそう。

一度曲に入ったら、心まで入り込んで…

そして、緊張なんてどっか行って、楽しくなってくる。

風太君の声、すごく心に響く…

間奏中、ドラムをたたく私のもとに、純君と留依君が来た。

風太君はちー君、真司郎君は直人君のもとに。

やっぱり、楽しい。

曲の演奏は、あっという間だった。

練習以外でみんなと合わせたのは初めて。

そして人の前で演奏したのも初めて。

終わった途端、また緊張が戻ってきた。

「いやぁ、二人、疑惑晴れたね」

「まだ晴れてへんやろ」

「でもカッコよかったよ。な？」

「確かに…めちゃめちゃカッコよかった！」

「純、よかったね！」

「うん！」

「「やっぱ女々しいなぁ」」

初収録、一時間近くに及んだ。

長いのにあっという間で…

本当に楽しかった。

終わってからの楽屋。

衣装着替えたり、今後のスケジュール聞いたり…

『――――ってことで、明日は雑誌の取材ね』

「はい、分かりましたー」

社長直々の電話で。
本当はマネージャーが必要だけど…
私がいるから、社長がマネージャーやってくれてる。
本当にありがたい。

「雑誌かー」
「また今日みたいなノリで行くか！」
「…何気にテンション高すぎたと思うけど」
「いーじゃん、いーじゃん！」
「ハイテンションがグループ名の由来だし」

デビューまではあっという間だったけど…
これから先、まだまだ長い。
…女ってバレなければいいけど。

「お、俺？いやいや、無い！」

「まだちょっとかたいなぁ～」

「す、すみません…」

「謝んなくていいよ。はい笑って～、そうそう！」

雑誌の取材は無難にこなしたけど…

撮影に苦戦中な私。

やっぱり元々ど素人なんだから。

それにしても…

「おぉ～いいねぇ！」

「じゃそれ持って、わーって…そうそう！」

みんな、慣れてる。
純君はそのままで表情かたくないし。
あれは…アイドルスマイル？
でも、なんか違う人たちも…

「やめろって！」
「えー、ギューってしてくださいって言ったもん」
「だからってそんな近づかなくても…あー！」
「んふふ」

ちー君と直人君…やっぱり、これはデキてる？
くじ引いてコンビを決めての撮影。
私と真司郎君と直人君、この三人になった。
他は、風太君と純君、ちー君と留依君。

「じゃあ三人でくっついて～」
「ギュー！」
「だからそんな言わなくていいって！」
「いいじゃん、ねぇ？」
「う、うん」
「ほ～ら、葵困ってるじゃん！」
「そ、そうだったの…？」
「う～ん…あ、でも嫌じゃないよ？」
「なら良いじゃん。ギュー！」

楽しい。
慣れてきたって事もあると思うけど。
男の人たちに囲まれてるのに、楽しいって思える。
今日のカメラマン、女の人でよかった…

「そろそろ最後かな〜、いいねぇ！」
「最後、俺葵にちゅーしてやるわ！」
「え、えぇぇぇ！」
「ちょ、風君それはダメ！」
「留依は関係ないやろ？それとも、まさか…」
「お、俺の意見は…無視？」
「葵！風君とちゅーなんて嫌だよね！」

それは…うん、嫌です。
て言うか、留依君そこまで必死にならなくても…

「ちぇー。じゃお前ら二人ちゅーしろよ」
「お、俺？いやいや、無い！」

「う～ん…別にいいけど？」

「俺は絶対嫌だっ！」

ターゲット、あの怪しい二人に変更。

風太君、そんなにもちゅー好きなんだね…

よく分からない人だ。

「今日はありがとうございました」

「みんな仲いいし、楽しかったよ～！」

無事、撮影は終了。

スタッフさんは片付け始めてる。

で、挨拶を済ませたメンバーは…

「何食べる？」
「みんなで入れるところ行こうや」
「予約しなきゃ！」
「で、結局何食べる？」
「…焼肉食べたい」
「じゃ焼き肉で決定～」

只今の時刻、午後六時半過ぎ。
ちょうどおなかが減ってくる頃。
で、晩ご飯の相談を始めた。
留依君の一言で決まったけど…
ひどい時は、全く決まらずコンビニ弁当、とか。
とにかく、自由すぎるメンバーなのです。
「あ、そうそう。近いからみんな歩きな！」

「えーっ、これから？」

「めんどくさいよぉ…」

メンバー中最も自由なのは、風太君。

一番年上でリーダーなはずなのに、ね。

◇瑠衣story

「んー…はぁ、雨かぁ…」

忙しくなってきた今日この頃。

つかの間の休日…は、ものの見事に雨。

どこにも行きたくない気分になる。

テンションもいつになく低くなるし…

だから、小さい頃から雨は嫌い。

トントントン…

「は～い、誰ですか～？」

「るぅぅぅいいいぃ」
「ルーイーって…えっ、あのサッカー選手！？」
「なんか惜しいけど、違うー」
「…はいはい。どーぞ」
「ん、お邪魔しまぁす」
「お邪魔はしないでください」

留依君が、部屋に遊びに来た。
この人、実はかなり危険人物で…

「葵、やっぱりちっちゃい！」
「な、ちょっと／／／」
「それに、ギューってしたら折れそう！」
「うっ、く、苦しい…」

遊びに来るたびに、エスカレートしてる。
前にあった抱き枕の件から…
最近は、部屋に来るたびにギューって抱きついてくる。
そして小さい事をからかってくる。
そりゃ身長差２０センチあるけど…
留依君の背が高いだけだと思う。

「ねぇ、今日、何の日か知ってる？」
「ん？知らないけど」
「…本当に？」
「う、うん？え、何かあったっけ…？」

今日は２月１７日。
バレンタインも終わったし…

ひな祭りもホワイトデーも…まだ先。

私が何か悪いことしたように感じるのは…

留依君が、寂しそうな顔するから。

何か、忘れてるっけ…？

「…今日、俺の誕生日」

「へっ、う、嘘！？」

「嘘じゃないし」

「知らなかった…ゴメン」

実は、まだメンバーの誕生日を知らない。

知るチャンスはあったんだけど…

面倒くさくて調べなかった。

私の悪い癖、なかなか治らない。

「別にいいよー」

「う、せっかく謝ったのに…」

「チューしてくれたら許すー」

「…はぁ？」

この人もよくわからないしつかめない。

不思議ちゃんってのは知ってたけど。

それにしても、ちゅーはないだろ、うん。

女って知っててそれ言うのは…変態。

変人、ストーカー…いや、それはないか。

「もーいい。…女ってバラしてやる」

「な、ちょ、それは…ね？」

「なら、チューして？」

そんな、年上に上目使いで言われても…
とか言いながら、ちょっとキュンとしてる。
瑠衣君、甘え上手だから。

「それだけは嫌」
「誕生日なのに…」
「嫌なもんは嫌」
「ケチー」
「ケチで結構」
「…馬鹿」
「馬鹿で結構」

このままじゃ、ずっと繰り返しそう。
あったかいココアを作ってあげることにした。

「どこ行くの～？」

「ココア作るから、それで我慢して」

「…仕方ない」

何様だよ、って思ったけど、今日だけは許す。

誕生日らしいから。

「はい」

「ありがと」

「…お誕生日、おめでとう」

「うん、ありがとう」

ココアを飲むと、フワッて笑った。

この笑顔に、私は弱い。

撮影中とかは、男って意識してるから我慢してるけど…

今は超プライベートだし。

「…あの、いつまで居るんでしょうか？」

「んー、いつまでも？」

「聞き返さないでよ」

「じゃあ、いつまでも！」

「そんな断言されても…」

「…そんなに帰って欲しい？」

「…うん」

「それはそれで悲しいな…ま、いいや」

やっと立ち上がった。

もう、ここへ来て二時間も過ぎてた。

「じゃ、明日」

「また迎えに来て？」

「…寝坊しないように努力して」

「…頑張ってみる。じゃね———」

たった一瞬。

だけど、時間が止まったみたいに…

瑠衣君が帰ったあとも、玄関で立ち尽くしてた。

朝からテンションは低い。

でも、今は…心臓が、バクバク言ってる。

私、結局チューされちゃったんだ…

「そ、それないって！クリーム嫌！」

新曲のレコーディング。

ドタバタだったけど、新しい年度になったわけで。

桜がほんのちょっとだけ咲いてたり。

ガチャッ

「見てーっ！そこでファンの子に貰ったぁ！」

「わぁ！そのチョコ頂戴！」

「えー…って、留衣食べてるじゃん！」

相変わらず騒がしい。

…賑やかなのは構わないんだけど。

「静かにしないと、もうすぐ風太君がレコーディングするから…」

「ほーらー、そこの男女、静かに座りなさい」

「る、留衣ぃ、酷いよぉ…」

若干、立場逆転してる気が…する。

直人君の方が年上だよね、確か。

留衣君にそんなSっ気があるとは思わなかった。

あの誕生日から数日、かなり気まずかった。

多分、そう思ってたのは私だけ。

だから、留衣君は慣れてるのかなぁ…とか思って、軽くショックを受けて…。

って、あれ、なんか私、おかしい…？

「葵、食べる？」
「あー…いや、今食べたら喉乾くから」
「お茶あるよ？」
「…いや、いい。うん、やめとく」
「そう？美味しいのに」

これでも、かなり普通にしゃべれるようになったと思う。
あと、メンバーには心を許せるようになったし…
私にしては、大きな進歩だ。

「あっくん、あっくん！」
「ん？」
「あとでこの前出来たケーキ屋さん行こうよ！」
「ケーキ屋さんって…あぁ、あそこか」
「ねぇ、行こう？」

「いいけど」

純君は私のことを“あっくん”って呼ぶ。

時々、直人君もそう呼ぶ。

「俺も行っていい？」

「いいよ、いいよ！たくさん買って、一緒食べようよ！」

「チーズケーキ買ってきて」

「ちー君も行けばいいじゃん」

「俺、今からレコーディング」

「ふーん…ショートケーキ買ってきてあげるよ」

「そ、それないって！クリーム嫌！」

最近知ったこと。

ちー君は、生クリームが食べられない。

で、案外イジりやすい。

私にもＳっ気があるらしい。

「んふっ、間接キスだね」

ショーケースに並ぶ、美味しそうなケーキたち。
もう、キラキラ輝いて見えちゃう。
やっぱり、私は女の子なんだなぁって思う。
甘いもの好きだし、特にケーキなんか。

「うわぁ…どれにしよう…」
「俺これとー、これとー…」
「…留衣君、何個食べる気？」
「んー、だって食べたいんだもん、全部」
「ぜ、全部！？」
「あ、僕これにしよー」

結局、全員分あわせて２０種類も買ってしまった。
ちゃんと、ちー君のはチーズケーキにしておいてあげた。
でも次はショートケーキだな、うん。

「んはっ！ほえ、ほいひー！」
「口の中なくなってから喋ってよ」
「うぐっ…う、これ、おいしー！」
「てか、なんでもう食べてるの」
「だって、美味しそうだったし」
「…理由になってないし」
「ひとくち、いる？」
「…」
「あ、食べたいんだぁ」

図星。

確かに、早く食べたい気もする。

だからと言って…ねぇ、これ。

食べちゃったらさ、食べちゃったらさ…

「ほら、食べてもいいよ？俺の食べかけだけど」

「あーっ、僕食べたい！」

「いいよ、はい」

「むぐ、っ！これ、おいひー！」

「ほらほら葵君、どうしますかぁ？」

あー、イライラする、この態度。

もう、こんなの考えるのやめよう。

食べたい時に食べちゃえ！

「ふぁぐっ」

「うおっ！いきなり食らいついた！」

「あっくん！これ、おいしいね！」

「…おぅ」

あ、うん、美味しいじゃないか。

ほかのケーキにも期待できそう。

「んふっ、間接キスだね」

「んぐっ…」

もう、留衣君わからないや…。

ケーキ、のどに詰まらせちゃったし。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n0609w/

がむしゃら！

2011年12月21日03時49分発行